

優秀賞

## 傷ついた心

神奈川県 川崎市立幸町小学校五年 上原 蘭丸

ぼくは戦争を知らない。夏になるとニュースやドラマでみる程度だ。そんなぼくに母は曾祖母の話をしてくれた。

中学生のころから曾祖母と三人で暮らしていた母は、夕食の時に曾祖母からよく戦争の話聞かされたそう。曾祖父は戦争の話きらい、

「そんな話はするな。」と怒っていた。

曾祖母は、昔かんご婦をしていた。日本赤十字社というところがかんご婦をしていた曾祖母は、一九四四年戦地へ行かなければならなかった。しかしそんな時、おなかに赤ちゃんがいることがわかった。それは、ぼくの祖母だった。曾祖母は、戦地への派けんがめん除された。代わりに曾祖母の同りょうが派けんされることになった。それは曾祖母の仲のよい友人だった。それから曾祖母は、罪悪感を何

十年もかかえて生きることになった。そしてかんご婦であった事実をかくして生きた。同りょうにもうしわけない気持ちや、お国のために仕事をしなかった事への罪悪感、ばっせられる事への恐怖、いろいろな感情があったにちがいない。母は、曾祖母が天じょうに向かって、手をこすりあわせながら、

「○○さんごめんなさい。婦長さんごめんなさい。」と謝る姿を何度も見たそう。

曾祖母は子供たち、つまりぼくの祖母やその兄弟にも、自分がかんご婦だった事をひみつにしていた。何十年もたってやっと孫である母に、自分がかんご婦だった事をうちあけた。それまで戦争で亡くなっただけが傷ついていると思っていたぼくは、しゅうげきを受けた。戦争は、戦地で戦った人はもちろん、その家族やぼくの曾祖母のような戦えなかった人にも深い傷を残した。戦地に行かなかった事がそ

んなに悪いことなのか？戦争が怖い、いやだと思っ事の間違ったことだったのか？幸せな現代に生まれたぼくには理解できなかった。今は自由に発言や行動ができる世の中だ。インターネットでは、姿がみえないのをいいことに自由すぎるくらいだ。けれど昔は違った。自由に発言することはゆるされず、恐怖に支配されていた。

もしもあの時曾祖母のおなかに赤ちゃんがいなかったら、今のぼくはここにいない。曾祖父は母に、「にんしんすれば、おばあちゃんを危険な場所に行かせなくてすむと思ったんだ。」

と言ったことがあったそう。ぼくは正直ほっとした。

ぼくが曾祖母の話をするのは、もしかしたら曾祖母の意志に反するのかもしれない。

母は話の終わりに、

「実際に戦争にかかわった人の話を直接聞けるのは、私たちの代で終わりがな。」

と少し悲しそうな顔をした。ぼくは思った。

自由な現代になった今でも、戦争で傷ついた人の悲しみは消えることはない、と...

